

直言

金丸信・元副総理と田辺誠・社会党副委員長をそれぞれ団長とする自民・社会両党代表団は、この九月二十四日から二十八日まで、平壤を訪問する。わが国と朝鮮民主主義人民共和国(北朝鮮)のあいだには、国交もないばかりか、一般国民の渡航も制限されていて、平壤は北京に比べても距離的にはずつと近いのに、ほとんど交流がないまま閉ざされているのだから、今回の訪朝団実現を契機に、日朝間の窓が広がることは是非必要なことだといえよう。

私自身、本年四月下旬から五月上旬にかけて、日本国際政治学会(東アジア分科会)訪朝団長として平壤を訪れ、日朝間の交流拡大への機が熟しつつあることを感じてきただけに、懸案の第十八富士山丸問題の解決にとどまらず、様々な障壁が除去される契機になるのではないかと期待している。

今回の訪朝団が従来のように北京経由では

金丸訪朝団への期待と不安



東京外国語大学教授
中嶋 嶺雄

なく、第三国の飛行情報区(FIR)を一切経由しない文字通りの直行便を使用すること、国際電気通信衛星機構(インテルサット)の通信衛星を北朝鮮側が使用できるようになったことなどは、この国が国際社会の一員に迎えられる道を開くものとして、将来の貿易事務所設置や国交正常化という問題に劣らず重要だといえよう。

だが同時に、今回の訪朝団については、様々な不安がないわけではない。

それは、日朝間の懸案としての「謝罪」と「償い」といった外交案件を扱うにしては、今回の自・社両党訪朝団が、きわめて生々しい国内政治を背景に形成されたものだからである。

それだけに、わが国の国益や国際環境全体を冷静に見渡した交渉ができるものかどうか、懸念するのは私のみではあるまい。

朝鮮半島をめぐる国際環境は、ソ連、東欧の変化や中国情勢とも関連して、きわめて流動的であるだけに、そのような変動に対処し得る外交感覚を果たして金丸氏に期待できるだろうか。

少なくとも、先日北京訪問で、いままったくその必要性もなく、その時機でもなく、また、そんなことをすべきでもないばかりか、その可能性もないのに、中国と台湾との統一の橋渡しをしたいなどと発言した金丸氏の外交感覚では、流動する今日のアジア情勢とどうい対応できないことだけはたしかである。